

曹洞俳壇

選・村松五灰子

家を出て懺悔の日々や草の花

福岡県 安部 正和

評 人はそれぞれ様々なドラマを持つ。作者も草々の花に心を寄せる時、よみがえる過去のこと。「懺悔」という葛藤に、そえて「草の花」としたところに、いよいよ余情を深くする。

茗荷の子梅酢に漬けて老一日

岐阜県 西尾美恵子

評 老いには老いの一役。採れたての我が家の茗荷の子、丁寧に掃除をして洗い、と何かと手順もあるのだろう。楽しみながらで一日暮れた。茗荷の酢漬けというその庶民性も味わいを高めている。

◆寄せ書きの日の丸我が身土用干

岩手県 関合 新一

◆相続の書くもの多し秋灯下

青森県 高橋 敬子

◆参禅の静寂に開き桔梗かな

群馬県 栗原久美子

◆青簾声かけて去る裏通り

三重県 山下 利夫

◆立冬や火入れまじかな登窯

埼玉県 橋本 永子

◆朝顔と一緒に起きる八十路かな

静岡県 水口 淳

◆荒神輿千里を駆くる如きかな

岩手県 鈴木 道昭

◆水引草しずけさに殖ゆ寺の門

宮城県 鎌田登喜子

◆宅配車路地にはばかり残暑かな

秋田県 鈴木 ゆう

◆魂棚の遺愛の時計見てをりぬ

静岡県 望月かほる

*選者吟

美しくマスクに籠り文庫本

五灰子

*作句小見

一年は早いものです。時間は命。俳句もまた時間、良い年を迎え大切に使用したいと思います。ますます寒くなって参ります。来年も皆さまのご投句楽しみになっています。

落としもの霜をかむりて恙なし

一平

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

雨に濡れ馬が主人を待つやうにたたづみを
りぬ宅配便車
岐阜県 後藤 進

評 宅配便の車を機械とみなさず生き物と捉えて詠う。愛車を馬に喩えることはあるが、宅配便車は働く車で、その背後には働く人がいてその人への温かさがあればこそその比喩と思う。「雨に濡れ」の詠い起しも馬の喩えを際立たせている。

あてもなく出で来て朝明け出穂の甘き香の道
足が知ってる
山形県 多田 さよ

評 自分の意志で歩いているのではなく足が勝手に動いて稲の甘い香りのほうへ向かわせると、朝の散歩の、足の向くまま気の向くままの雰囲気をも、たつぷりと豊かに表現している。

- ◆母だけが通いし農道残りいて秋の七草花こぼしいる
東京都 鈴木 正作
- ◆稲刈りて村が小さく見えもせり出稼ぎ団の発つ無人駅
秋田県 小田 眞恭葉

◆尻もちをつきて十日の過ぎゆけり日々知らざる尾骨の
仕事
茨城県 太田 弘美

◆釣船草水引草が乱れ咲く瀬音高まる築場への径
宮城県 鎌田登喜子

◆呼鈴の向うの姿覗き見る鍵の不要な暮しが恋し
岩手県 関合 新一

◆雨あがり燕飛び交うさま見ればあつとニアミス、カーブ
でかわす
山口県 縄田 文人

◆山寺に帰りて見れば女郎花小萩通草迎えてくるる
東京都 小沢 芳樹

◆箒目に散りても清し夏椿朝の寺苑に足音生まる
愛知県 田中 澤子

◆地球の絶えぬ戦に胸痛む惜しき人逝き我残りの
カリフォルニア 井上 健一

◆幼子は初の補助なし自転車に転びては乗り乗りては転ぶ
北海道 吉田 洋子

*選者詠

あらくさに名を当てはめて落ち着きぬ空地
の車前草野の風知草
ちづ

*作歌小見

アメリカから応募してくださった井上さんの反戦歌。八十年代後半の方なれば、第二次大戦の様々の辛い体験が背景に偲ばれます。未だに地球上に戦火の絶える日はなく以前の生活が出来ない人たちが大勢いることに、同じく胸が痛みます。



大本山永平寺



臘八摂心ろうはつせつしん

何かと慌ただしい年の暮れになりました。この時期永平寺では、お釈迦さまの成道会じやうどうえに因み、一日より八日未明まで臘八摂心が行じられます。

「臘ろう」は臘月ろうげつ（十二月）のことで、「八」は一日より八日までを表し、「摂心せつしん」は散乱しがちな心をおさめ、ひたすら坐禅に打ち込む行のことをいいます。摂心中は、午前三時から午後九時までほとんど単たんから下りることなく坐り続けるのです。

いわゆる坐禅は習禅にはあらず。ただこれ安楽の法門なり。

普段夜坐やざの最後にお唱えする普勸坐禅儀ふかんざぜんぎの一節です。坐禅は習いごとのように上達を目指すものではありません。道元禅師さまはひたすらに坐る時、自ずから湧き起る心の安らぎを「安楽の法門」と表され、その安らぎは坐禅によって導かれるとお示しです。しかし実際には、足腰等の痛みや、はげしい眠気に耐えながら僧堂そうどうでの一週間を過ごします。

摂心中において、坐禅は「安楽」とはほど遠いものを感じられますが、集中的に坐ることで改めて坐禅の基本が身に付き、普段の修行で行う坐禅がより充実したものとなるのです。

ご本山だより



大本山總持寺



ろうはつせっしん
臘八摂心

いそがしく 時計の動く 師走哉

正岡子規

總持寺はじめ全国の修行道場では、十二月一日より八日未明まで「臘八摂心」が修行されます。また、それぞれのお寺でもこの期間は、住職や檀信徒の方々が坐禅にいそしみます。冬の季語にもなっていますが、臘八とは十二月八日のことです。

お釈迦さまは菩提樹の下で一週間坐禅をされ、八日の明けの明星をご覧になってお悟りを開かれました。

その御跡を慕い修行するのが臘八摂心であります。期間中は、修行僧も役寮も日常の諸行持を休止し、早朝三時より夜九時までひたすら坐禅に打ち込みます。

八日には、お釈迦さまのお悟りを祝う「成道会」の法要が、江川禅師さまを大導師につとめられます。

一年の締めくくりに摂心を修するのは、実に意義のあることであり、修行僧たちは新年に向けて発心を新たにします。

さて、来年はいよいよ峨山禅師六百五十回大遠忌の正当を迎え、一年を通して法要や関連行事がつとめられます。

五十年に一度の得難きご縁に、是非とも總持寺にご参拝くださいますよう心よりお待ち申し上げます。

大本山總持寺／045-581-6021